

令和 3 年度病害虫発生予報 第 2 号（6 月予報）の送付について

このことについて、下記の通り発表しました。

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水稲	トビイロウンカ	早い	多い
	イネクビホソハマシ（イネドロオイムシ）	平年並	やや多い
カキ	カキノヘタムシガ	やや早い	平年並
	チャノキイロアザミウマ	平年並	やや多い
	炭疽病	やや早い	やや多い
	円星落葉病	やや早い	やや多い
	うどんこ病	やや早い	平年並
ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
	黒星病	やや早い	やや多い
チャ	クワシロカイガラムシ	やや早い	平年並
トマト	葉かび病	平年並	やや多い
キク	ハダニ	平年並	やや多い
キク・トマト	アザミウマ類	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通	オオタバコガ	早い	多い

○気象予報（近畿地方の 1 ヶ月予報：5/29～6/29）

気温：平年より高い確率が 50% 降水量：平年並 日照時間：平年並

○今月の農薬適正使用のポイント

6 月 1 日～9 月 30 日は農薬危害防止運動の重点実施期間です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農薬適正使用について指導の徹底をお願いします。

1. 農薬散布時の注意事項

- ①農薬散布は、極端な高温、低温時を避け、散布後に葉が濡れた状態が長時間続かないように、散布時間帯や天候、換気等に配慮しましょう。
- ②散布後に葉が乾いてから、残った薬液等による重複散布を行わないようにしましょう。薬害、農薬残留基準値超過の恐れがあります。

2. 水稻の育苗箱施用

水稻の育苗箱施用を行う場合は、十分な薬効を確保するため、以下の点に注意します。

特にトビイロウンカ防除剤を使用する場合は注意して下さい。

- ①ラベルに書かれた規定の処理量を遵守します。
- ②移植直前に処理する場合は、処理後に軽く散水し、稲体に有効成分を吸収させてから移植します。
- ③移植後はかけ流しを控え、止水期間を厳守します。

3. 農薬の適用作物名

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○ネギとワケギ

その他、判断に迷った場合には、病害虫防除所や各農林振興事務所へお尋ねください。

※農薬に関する情報は、令和3年5月27日現在の登録内容に基づいて記載しています。

I. 普通作物

1. 水 稻

（1）苗立枯病、苗立枯細菌病、苗腐敗症（もみ枯細菌病）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並（平坦地域）

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、平坦地域の苗床での発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 高温管理等が発病を助長しますので、施設やトンネル育苗では日中の温度管理に特に注意します。
- 2) 育苗は、排水および通気性を確保して、高温管理を避けます。発生した育苗箱は処分または隔離します。

（2）ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。
- 2) 近年、本病が増加しており、菌密度が高まっている可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は見つけ次第抜き取って処分します。
- 2) 育苗時に多発した場合は、次年度必ず全ての種子を更新します。

(3) いもち病 (葉いもち・苗いもち)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、中山間地域の本田での発生ほ場率7.7%でした。
- 2) 6月の降水量は平年より多いと予想されており、発生を助長させる恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域では、オリゼメート粒剤を箱施用した場合には6月上旬以降に、ブイゲット箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤等の長期残効型薬剤を処理した場合には7月上旬頃にいもち病が初発する可能性がありますので、早期発見と早期防除に努めます。但し、箱施用剤の残効期間は、天候や施肥量によって前後するので注意します。
- 2) 置き苗は伝染源となりますので、必ず早めに裏返して水没させ処分します。

(4) トビイロウンカ

予報内容 発生時期：早い 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 5月中旬に、予察灯(桜井市池之内)に飛来世代のまとまった誘殺を確認しました。
- 2) 多発した昨年より飛来が1ヶ月早く、飛来量は平年より多いです。すでに田植えが終わっている水田では8月の坪枯れ発生が懸念されます。
- 3) 今後、梅雨明けまでは断続的に飛来する事が予想されますので、6月に田植えする水田でも警戒が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 6月に田植えする水田では、有効成分にトリフルメゾピリムを含む箱粒剤を処理します。
- 2) 5月に田植えを終えた水田では、有効成分にトリフルメゾピリムを含む箱粒剤を使用していない場合は、6月中旬に本田防除が必要です。
- 3) 令和3年5月26日付けで病害虫発生予察注意報第1号を発表していますので、防除の詳細はそちらをご覧ください。

(5) ニカメイガ (第1世代)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) この数年、発生は認められていません。
- 2) 発蛾最盛期は6月4半旬と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 第1世代の防除適期は、発蛾最盛日から5～7日目の6月5半旬となります。
- 2) 本種は局地的に発生する場合があります。これまで発生がなかったほ場でも、寄生や被害が見られないか株元を中心によく観察します。

(6) イネミズゾウムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 山間部～中山間部の早植え地域では、成虫の発生ほ場率は54%と平年並の発生です。

防除上の注意事項

- 1) 発生が多い地域では、水田をよく注意して観察し、成虫が株当たり0.5頭を越える場合は、体系防除を行っている水田でも追加防除を行います。
- 2) 発生が水田周縁部に限られる場合には、額縁防除も有効です。

(7) イネクビホソハムシ (イネドロオイムシ)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い (中山間地域)

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。6月の降水量は多いと予想されており、注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 越冬成虫の水田への侵入が始まる時期です。昨年度発生していた地域で、移植時にオリゼメートオンコル粒剤を使用した場合は、6月上旬に投げ込み剤で防除します。
- 2) 移植時にアドマイヤーやプリンスを含む箱粒剤を使用した水田でも、残効が切れてから成虫が侵入する恐れがあります。ほ場をよく観察し、成虫もしくは卵塊を発見した場合は防除します。
- 3) 防除薬剤は投げ込み剤のなげこみトレボンが省力的です。発生ほ場ではトビイロウンカとの同時防除を狙って6月中旬に処理します。

II. 果樹

1. カキ

(1) カキノヘタムシガ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 御所市に設置したフェロモントラップによる誘殺数調査では、成虫発生開始が5月13日(御所市)で、発生盛期は24日頃と推定されます。

防除上の注意事項

- 1) カキの生育状況の指標として、「富有」の満開10日後が防除時期の目安となることから、防除適期は5月31～6月2日頃であると思われます。ミツバチの箱の引き上げ後に防除を実施します。
- 2) 昨年発生が多かった園地では、散布1週間後に再度防除を実施すると効果が高まります。

(2) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、寄生花(果)率が0.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は6月中下旬の若齢幼虫期です。白綿状の卵塊を見かけてから10日後以降に散布むらのないように十分量の薬液を散布します。
- 2) 夏以降はカイガラムシの生育ステージが乱れ、薬剤の効果が表れにくくなりますので、今回の防除で密度を十分に下げておくことが重要です。

(3) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 一部地域では5月下旬以降、黄色粘着板への誘殺数がやや多くなっています。誘殺数のピークは北部地域で5月21日、南部地域の5月20日となっています。

防除上の注意事項

- 1) 第2世代の成虫の発生ピークは北部地域で6月中旬、南部地域で6月下旬と予想されます。
- 2) 昨年度が多発園や被害が目立つ園では2週間おきの防除と、第3世代の成虫ピークである7月上中旬にも追加防除が必要です。

(4) 炭疽病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では新梢の罹病枝率は0.1%でした。
- 2) 5月中旬に梅雨入りしており、例年より早くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期は炭疽病防除にとって最も重要な時期であり、予防散布を徹底します。
- 2) 降雨が続く場合や前年発生園では、基幹防除に加え殺菌剤の追加散布を行います。
- 3) 発病枝は他の新梢や果実への伝染源になるので、必ず切り取って処分します。
- 4) 枝の軟弱徒長は発生を助長するので、徒長枝の多い園地では肥培管理を見直します。

(5) 円星落葉病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 前年秋期の発生状況から、越冬菌密度はやや多いと考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 6月～7月上旬が主要感染時期となり、予防散布を適切に行います。
- 2) 前年に多発した園地では菌密度が高まっているので、適期防除を徹底します。

(6) うどんこ病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は1.0%の発生でした。

防除上の注意事項

- 1) 若葉上の病斑が目立つ園地では、感染拡大を防ぐため薬剤防除を徹底します。

2. ナ シ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は4.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期に入り降雨と共に孢子形成が活発になるので、新梢葉の発病状況および気象状況に注意して薬剤散布を行います。
- 2) 薬剤散布は棚上の発育枝葉に薬液が到達するように、十分量を散布します。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発病葉率は5.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発病した葉や幼果は見つけ次第必ず取り除き、園内に残さないよう処分します。
- 2) 梅雨期の降雨により発病が増加します。気象状況に応じた適切な防除を実施します。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、寄生密度の高い園は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布はていねいに行い、散布むらのないようにします。

3. カンキツ

(1) ミカンハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、平均寄生葉率は4.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 多発園では、同一系統薬剤の連用にならないよう注意し、防除を行います。
- 2) 発生園では、梅雨期間中に晴天が続くと急増することがありますので、こまめに観察し低密度の状態を保つように防除を行います。

4. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類

予報内容 発生時期：遅い 発生量：少ない

予報の根拠

- 1) 水銀予察灯へのチャバネアオカメムシの誘殺数は、5月下旬時点で0～7頭/日とやや少ない状況です。
- 2) 5月下旬にサクラ、クワ樹への寄生状況について巡回調査を行った結果、チャバネアオカメムシの寄生平均虫数は0.8頭/樹と全体的にやや少なくなっています。

防除上の注意事項

- 1) 越冬成虫は全体的にはやや少ない発生ですが、山際の園地や一部の常発園では突発的な飛び込みには注意が必要です。
- 2) 飛来がない園での予防散布は、天敵の減少によってカイガラムシ類、ハダニ類の増加につながるなど弊害が大きいので控えます。

5. チャ

(1) 炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月第5半旬時点の一番茶葉での発生は平年並です。
- 2) 向こう1ヶ月の気象予報から発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 開葉期が防除適期になります。

(2) もち病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月第5半旬時点の一番茶葉での発生は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 炭そ病と同時防除を行います。

(3) チャノホソガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）での5月下旬までの誘殺調査では、発生量はやや少、発生時期は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 1～2葉開葉期が防除適期です。
- 2) 摘採間近に巻葉が見られた場合は、早めに摘採します。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 開葉～2葉期にかけて薬剤防除します。

(5) チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 開葉～2葉期にかけて薬剤防除します。

(6) カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 一番茶期での発生量は平年並です。
- 2) 向こう1ヶ月の気象予報から発生量は平年並と予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 一番茶期に発生した園地では番茶摘採後の防除を徹底します。
- 2) 被覆茶園での被害が散見されます。被覆前に寄生、被害状況を観察し、発生が認められる場合は早期防除を基本とし、被覆前に防除します。
- 3) 薬剤の感受性が低下するので、年間を通じて同一系統薬剤の連用は避けます。

(7) クワシロカイガラムシ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 発生時期はやや早く、越冬世代成虫の寄生株率は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 平年の防除適期は6月上旬ごろです。多発園では適期防除を徹底します。
- 2) 株の内部に薬液が十分かかる量で散布します。

(8) チャトゲコナジラミ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 一番茶期での発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は若齢幼虫期（成虫発生終息後）の6月下旬頃です。多発園では適期防除を徹底します。
- 2) すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の育苗床調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 雨よけ育苗で寒冷紗を被覆した場合には、特に発生しやすいので注意します。
- 2) 梅雨明けまではサンヨール、モレスタン水和剤等による予防散布を行います。サンヨール及びモレスタン水和剤は薬害が出やすいため、雨よけ施設内では散布日を含めて散布後2～3日以内に30℃以上の高温が予想される場合には使用を控えます。
- 3) 発生初期には、上記薬剤の他、ラリー乳剤等のDMI剤およびストロビーフロアブル等のQoI剤等を散布します。
- 4) 薬剤散布前には必ず下葉を取り除き、葉の裏側や未展開葉にも薬液が十分かかるように散布します。
- 5) 薬剤散布の3～4日後には葉裏の菌そう（白いかび）を観察し、薬剤の効果を必ず確認します。効果が劣る場合は使用を中止して他剤で早急に追加防除します。

(2) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の親株床調査では、発生は認められていません。
- 2) 今後、高温・多湿により発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 育苗床では発生前からの薬剤による定期的な予防に努めます。特に降雨前の防除に重点をおき、予防散布にはアントラコール顆粒水和剤やジマンダイセン水和剤などを行います。
- 2) 発病株や発病ランナーは、見つけ次第周囲の未発病株やランナーと共に除去して周囲に放置せず、密封処分します。その後、直ちに薬剤防除を実施し、以後の発病には特に注意します。
- 3) 多発した場合には、発生部分とその周辺をシートやビニールで密閉し、隔離します。
- 4) 育苗床の雨よけと底面給水や点滴かん水を併用すると、高い防除効果が得られます。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の育苗床調査では、発生ほ場率38%、寄生株率5.5%でした。

防除上の注意事項

- 1) 収穫後の本ぼはハウスを閉め切って蒸し込み、ハダニを殺した後に株を持ち出します。
- 2) イチゴの雨よけ育苗では、露地育苗と比べてハダニが増殖しやすいので、注意が必要です。
- 3) 薬剤のかかりやすい育苗初期は、薬剤抵抗性の発達しない気門封鎖剤を中心に防除を行います。
- 4) 抵抗性発達を遅延させるため、同一殺ダニ剤の連用は避けるようにします。薬剤の効果に疑問がある場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。

2. トマト

(1) 葉かび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率20%、発病葉率10%でした。
- 2) 密植、多湿条件で発生しやすく、肥効が切れると発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 葉かび病抵抗性遺伝子Cf-9を保有する品種での発病が確認されています。
- 2) 葉裏の病斑上に胞子が形成されると急速に拡大し防除が困難になるため、発病前にダコニール1000、オーソサイド水和剤などで予防散布に努めます。薬剤が葉の裏面にも十分にかかるように丁寧な散布を心がけます。
- 3) 発病初期には、下葉の罹病葉をすべて摘除し、ほ場から持ち出し処分します。その後1週間間隔で少なくとも2～3回以上、上位葉での発病が止まるまで定期的に防除します。但し、耐性菌の発生を防ぐため同一系統薬剤の連用は避けます。
- 4) 県内の主要産地ではQoI剤やSDHI剤の耐性菌が高頻度で確認されています。同一系統薬剤の連用を避けるとともに、薬剤の効果に疑問を感じた場合は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

3. ナス

(1) ミナミキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 露地ナスでは土着天敵のヒメハナカメムシ類が飛来し始めます。有機リン系、合成ピレスロイド系、ネオニコチノイド系、マクロライド系等、天敵に悪影響のある殺虫剤の使用は控えます。

4. ホウレンソウ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は20%、発病葉率1.4%でした。
- 2) 今後天候不順が続くと、発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) これまで本病が未発生の抵抗性品種でも、発病する可能性があるので十分注意します。
- 2) 今後も天候不順が続くと発生しやすいため、薬剤による予防に努めます。
- 3) 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場周辺に放置せず、埋没又は密封処分します。

5. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率80%、寄生株率2.0%でした。
- 2) 今後、夏にかけて増加期に入りますので、発生の拡大に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理の効果が比較的高いため、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの生育期株元灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率40%、発生株率2.0%でした。
- 2) 今後、気温上昇とともに増加するため、定期的に防除を行います。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイにも灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの株元灌注処理後もよく観察し、再発生が見られた場合は登録のある薬剤を定期的に散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。

6. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 20%、発病株率 0.6%でした。
- 2) 今後天候不順により発生がさらに拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 2) 罹病性の品種では、今後の天候次第で上位葉での発生が懸念されます。降雨前に丁寧に薬剤散布を行います。発生初期には下葉の罹病葉を除去後、アミスター20フロアブル、アンビルフロアブル、ラリー乳剤、カナメフロアブル等で防除します。ただし、薬剤耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用は避けます。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生は認められません。

防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生初期にはラリー乳剤、ダコニール1000等で防除します。

7. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類（野菜類、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率と平均寄生株率はそれぞれ、イチゴ育苗では63%と12%、夏秋ナスでは20%と3.6%、スイカでは50%と4%、ホウレンソウ、ネギおよびトマト、キクでは発生が認められていません。

防除上の注意事項

- 1) モモアカアブラムシやワタアブラムシは薬剤抵抗性の発達が認められています。特にワタアブラムシはネオニコチノイド系剤に抵抗性の個体群が確認されています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。
- 2) 露地ナスでは土着天敵に影響の小さいウララDF等を使用します。

(2) ハダニ類（ナス、スイカ、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：（キク）やや多い
（ナス・スイカ）平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回調査では、キクでは発生ほ場率 40%、平均寄生株率 0.8%、夏秋ナスでは発生ほ場率 20%、平均寄生株率 3.6%でした。スイカでは発生が認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 露地ナスとスイカでは主にカンザワハダニが発生しています。土着天敵に影響の小さいマイトコーネフロアブル、ダニサラバフロアブルを使用します。
- 2) キクではナミハダニが発生しています。抵抗性の発達が著しいので同一系統薬剤の連用は避けます。薬剤の効果に疑問がある場合は、各農林振興事務所または病害虫防除

所へご相談ください。

**(3) アザミウマ類 (ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ等)
(トマト・ホウレンソウ・キク)**

予報内容 発生時期：平年並 発生量：(キク・トマト) やや多い
(ホウレンソウ) 平年並

予報の根拠

- 1) 5月下旬の巡回では、キクで発生ほ場率80%、発生株率2.0%、トマトでは、発生ほ場率40%、白ぶくれ果率1.6%、ホウレンソウでは、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) ホウレンソウ・キクでは収穫適期を過ぎた放置株が温床となりますので、直ちに処分します。
- 2) ほ場周辺のクローバー、ヒメジョオン等の雑草の花に多く集まります。雑草は開花前に除草を徹底します。開花後に除草すると餌を求めてアザミウマがほ場内に移動してくるため、注意します。
- 3) ホウレンソウでは登録農薬が少ないので、上記手法や太陽熱消毒なども用いて防除を行います。
- 4) キクではクロゲハナアザミウマも発生します。葉裏をよく観察して、発生を確認次第、防除を行います。

(4) オオタバコガ

予報内容 発生時期：早い 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 越冬世代成虫の性フェロモントラップ(桜井市池之内)への誘殺開始が早く、誘殺量も平年より多く推移しています。
- 2) 5月下旬の巡回では、キクで発生ほ場率20%でした。ナス、トマトでは発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) オオタバコガは、孵化幼虫が新葉や花蕾から食害を開始しますので、対面作業の際に食害の発生の有無を観察します。
- 2) 幼虫の発育が進むと防除効果が低下しますので、早期発見と早期防除に努めます。
- 3) 防除の詳細は令和3年5月10日付け病害虫情報第1号を参照します。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農薬情報システム(農作物病害虫・雑草防除指導指針)

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara>